

農作物技術情報 第1号 畜産

発行日 平成22年 3月24日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4435)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

今年の自給飼料生産の計画を立て、準備を進めていきましょう。

1. 自給飼料の生産

近年の飼料価格高騰は畜産経営に深刻な影響を与えており、自給飼料の重要性が叫ばれています。

自給飼料生産は、国際相場や為替レート等に左右されない安定した経営の確立や安全な粗飼料の確保につながります。また、飼料自給率の向上を通じて食料自給率の向上に寄与します。

家畜飼養は家畜糞尿処理の問題が伴いますが、自給飼料生産により、堆肥の還元という資源循環型の農業が可能になります。ただしこの場合、家畜飼養頭数と自給飼料生産とのバランスが大切です。

自給飼料生産をもう一度見直してみませんか。

家畜飼養頭数に合わせた自給飼料生産の計画を立てましょう。

(1) 作付け面積の拡大

家畜飼養頭数にあった自給飼料生産面積が確保できていますか。

家畜糞尿処理のためにも、借地の効果的な活用や転作田の利用により、積極的に自給飼料用地の確保を進めましょう。

(2) 単収の向上

牧草の単収は20年前と同じ水準で、草地の老朽化が進んでいます。草地の植生・収量や土壌の理化学性などを調査し、計画的な更新を検討しましょう。更新の時期は8月中旬から9月上旬までが適当です。

また最近では、簡易草地更新機による更新も普及しており、完全更新に比べて迅速かつ低コストで実施することも可能です(写真)。

飼料用トウモロコシでは、TDN収量を確保するため、黄熟期に収穫できるような品種選定が重要です。



写真 作溝式簡易草地更新機

(3) 放牧の導入

近年、電気牧柵を活用した遊休農地、転作田等への放牧が県内各地で広まっています。

放牧の導入は、家畜の管理労力や経費を削減することができ、景観保全にも貢献します。

放牧で効果的な自給飼料の利用を進めてみませんか。

2. 草地管理

(1) 冬枯れの発生と対策

冬枯れは、雪腐病や積雪が不十分なため致死的外気温が直接植物体に影響して凍害をおこすことなどが原因で発生します。また、秋の刈取り危険帯(10月上旬から11月中旬頃)の時期の管理が影響し、越冬のために養分を蓄積するこの時期に刈取ると耐寒性が低下し、冬枯れを引き起こしてしまいます。

冬枯れによって枯死し、裸地が生じた場合には追播を実施しましょう。

また、昨年秋の作業状況をもう一度点検してみましょう。

(2) 施肥

牧草は平均気温が5℃になった頃から生育を開始します。

トラクタ作業による圃場の泥濘化の恐れがない時期を見計らい、極力早めの施肥で生育を促し、

1番草の収量向上につなげましょう。

牧草地における施肥基準は次のとおりです。

	施肥量 (kg/10a)		
	窒素	リン酸	カリ
採草地	10	5	10
放牧地	6	3	3

次号は4月22日(木)発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。